



#### キトラ古墳の予備調査

2001年12月6日、文化庁からの依頼で安全に石室内へ立ち入る方法を探るための調査に協力した。前回の明日香村による調査と同じくデジタルカメラでの撮影であるが、カメラの解像度の向上、挿入するポールの仕様変更などから新たな画像を得ることができた。

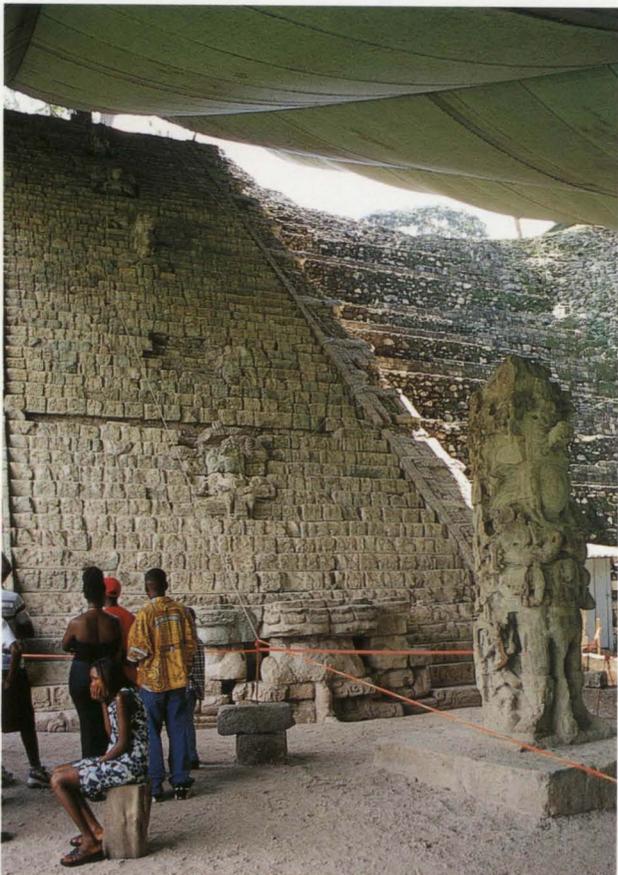
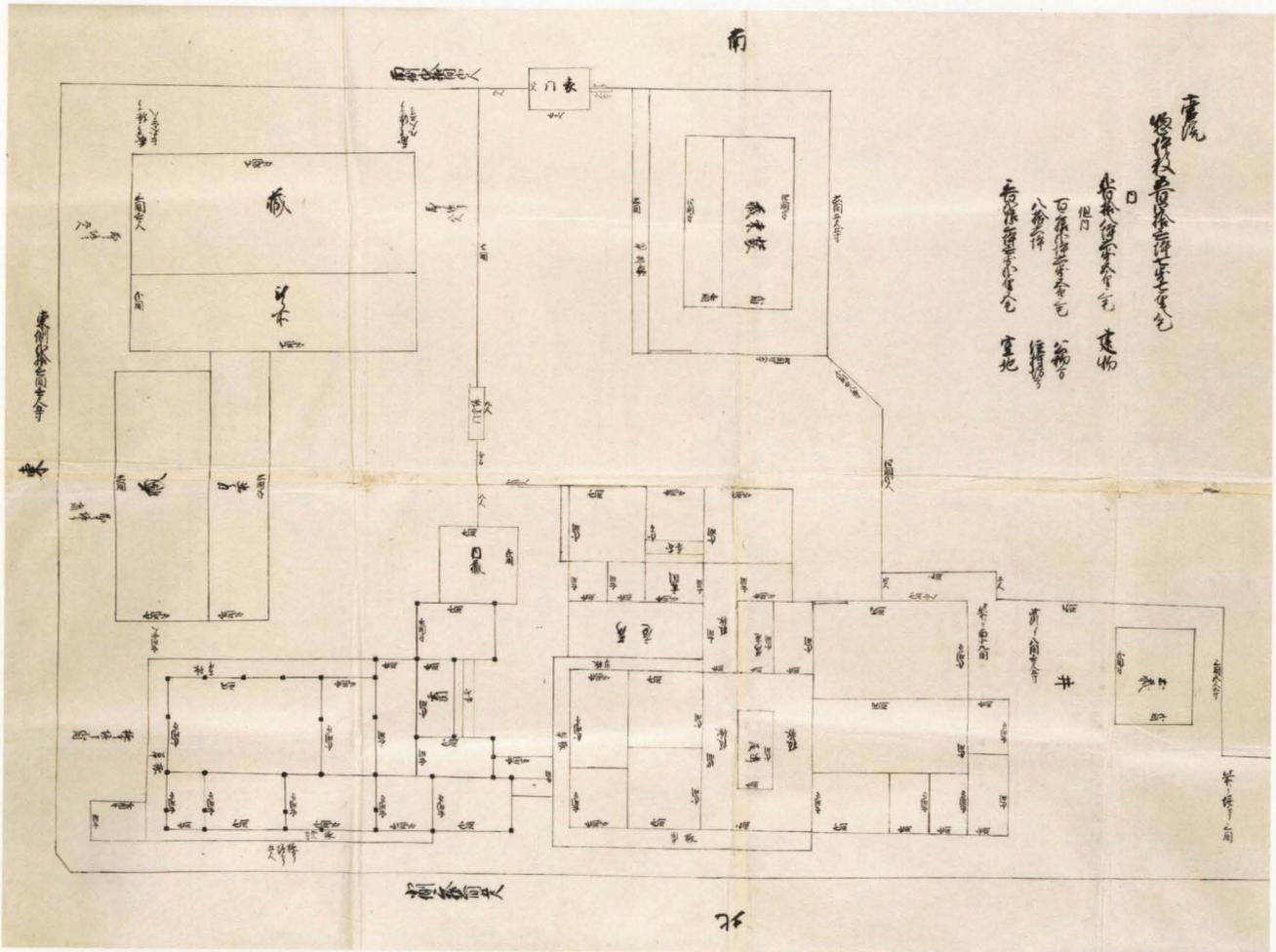
本文40頁参照 (撮影：井上直夫)

#### 西壁白虎像

白虎像は腹部を除きほぼ完璧な形で残っており、高松塚古墳の白虎像よりも保存状態が良い。のびやかで見事な筆遣いがよく観察できる。

#### 東壁獣面人身像

各壁面には3体ずつの人身像があったと思われるが、確認できるのは5体分である。4面で12体の獣面人身像があるとすれば、十二支である可能性が大きい。



興福寺子院絵図 唐院の絵図

唐院は北円堂の北方に位置した律宗の子院。中世・近世には興福寺の年貢や文書などを管理し、寺家の実務を担当する立場にあった。識語によると建物が公物方と住持坊方とに分類されており、公物方が存在する点に、唐院の特殊性が読みとれる。2軒の母家にはそれぞれ玄関があり、また大きな蔵が多数存在するのも特徴的である。「計り所」を持つ蔵には、寺家の年貢が収納されるのだろう。

本文6頁参照 (撮影：中村一郎)

コパン遺跡

マヤ文明を代表する遺跡の一つコパン遺跡は、内外の観光客が年間11万人訪れるホンジュラス共和国随一の遺跡観光資源。観光資源としての持続的発展のためには、保存に十分配慮した調査および修復整備が不可欠である。写真中央はコパン遺跡最大の見せ場のひとつ「神聖文字の階段」、右端の石像が「ステラム」。

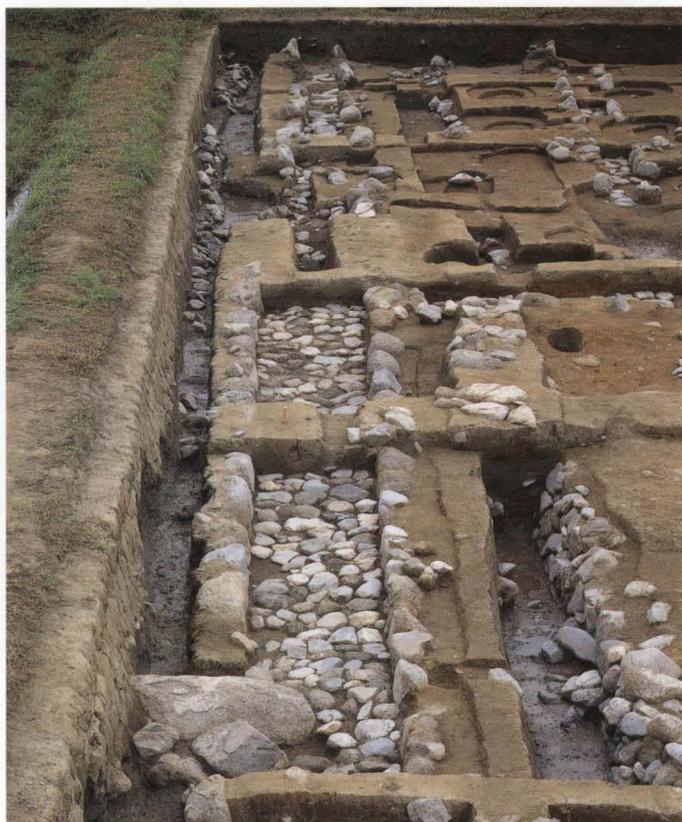
本文10頁参照 (撮影：小野健吉)



**石神遺跡（飛鳥藤原第116次調査）**

昨年度調査区の東隣接地を発掘した。東西と南北の基幹水路が幾度も造り替えられており、溝が錯綜している。昨年検出した東西堀は2時期とも延長部分を確認した。写真奥中央は飛鳥坐神社の柱、その右手が飛鳥池遺跡。北西から。

本文66頁参照（撮影：井上直夫）



**石神遺跡の石組溝（飛鳥藤原第116次調査）**

幅が広く深い石組溝SD3896を埋めて、底石を敷くSD3950に造り替えているのがわかる。SD3950は途中で幅を狭めており、右奥にはSD3951がみえる。ともに斉明朝の遺構である。西から。

（撮影：井上直夫）



藤原京左京七条一坊西南坪

(飛鳥藤原第115次調査)

藤原宮朱雀門にほど近い左京七条一坊西南坪では、坪の中央のやや南で大型の掘立柱建物SB500を検出した。その背後の池状遺構から多数の木簡が出土した。その内容は中務省の事務に関わるもので、ある時期、この大型の建物に中務省ないしその関連施設が置かれた可能性が考えられる。南東から。

本文58頁参照 (撮影：井上直夫)



池状遺構出土木簡

池状遺構SX501から出土した木簡は、木簡に記載されている年紀、位階の表記、官司名称などからみて、大宝元年(701)、二年を中心とする大宝初年の木簡群である。大宝律令施行当初の官衙における事務処理の木簡で、中務省関連官衙の木簡と考えられる。藤原京における京内官衙の展開をどうみるかなど、今後大きな議論を呼ぶであろう。

(撮影：井上直夫)



興福寺中金堂（平城第325次調査）

興福寺境内整備構想にもとづく第3・4年次の調査で、中金堂基壇を中心に発掘を行った。地山削り出しの基壇、巨大な礎石の迫力は圧倒的である。南面階段は独立三間で、回廊の金堂取付部は単廊という創建期の形態、あるいはその後の変遷について得られた多くの知見は、今後の寺院研究の上で欠かせないものとなるであろう。北西から。

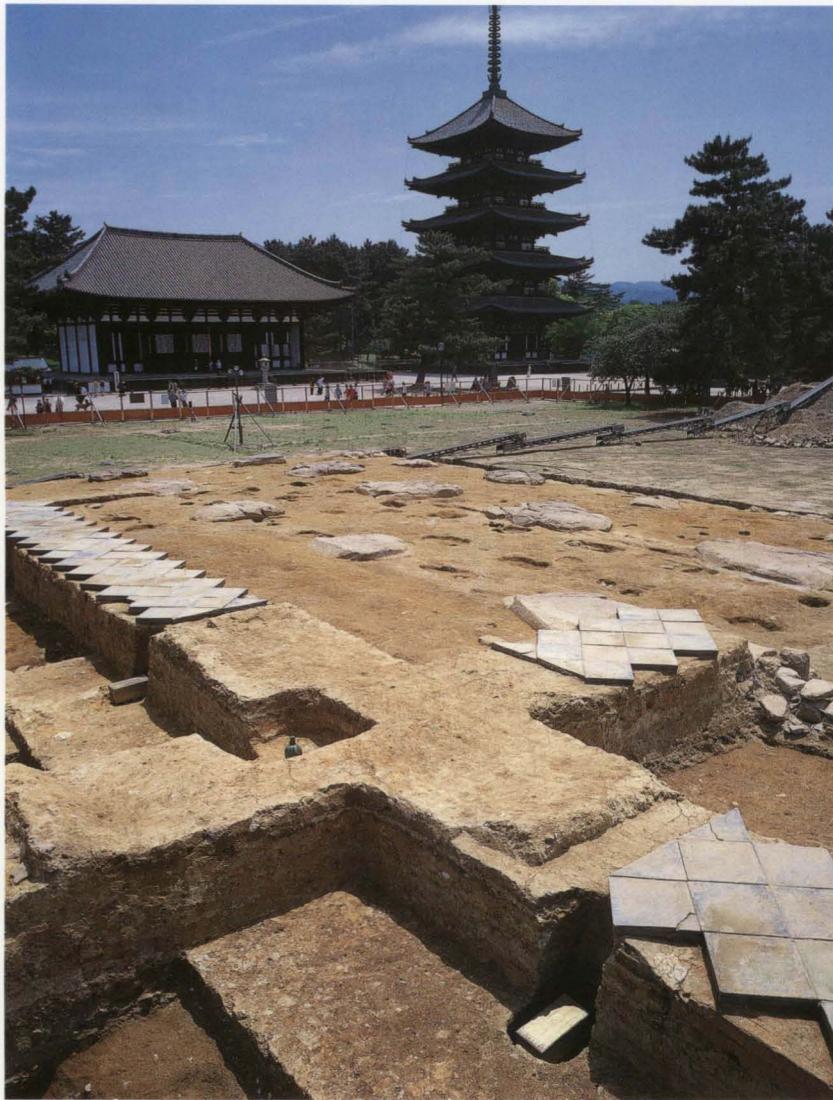
本文86頁参照（撮影：中村一郎）



出土した創建鎮壇具（平城第325次調査）

須弥壇東半で検出した土坑とその周囲から創建鎮壇具の一部である金延金、砂金、玉類、和同開珎などが出土した。

（撮影：牛嶋茂）



興福寺出土明治・大正時代の鎮壇具（平城第325次調査）

明治16年（1883）の中金堂返還後に積み直された須弥壇とその背面から、5基の鎮壇具埋納坑を検出した。中央には木箱に納めた水瓶形容器、東西南北に箱形容器を配す。箱形容器の中には金銀色の小壺、合子にいれた玉類、大量の銭貨が納められていた。

本文92頁参照（遺構撮影：中村一郎 遺物撮影：牛嶋茂・杉本和樹）





一乗院庭園の上層池（平城第330次調査）

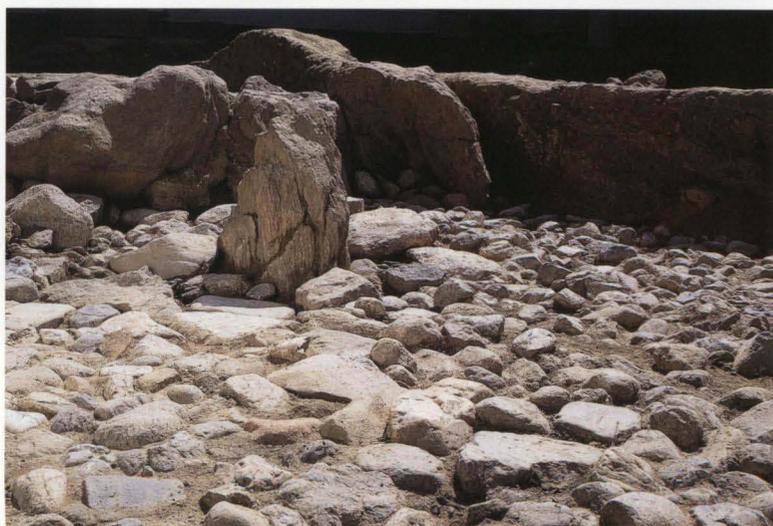
寝殿北側の園池の調査。池には下層と上層があり、上層池では護岸石組、池中立石、池底の礫敷などを検出した。南西から。

本文98頁参照（撮影：中村一郎）

上層池の池中立石

上層池西寄りで検出した池中立石と礫敷。拳大の礫を敷き詰め、浅い水面から立石が突き出すような景観を呈する。北西から。

（撮影：中村一郎）





大乘院庭園 西小池

(平成第336次調査)

庭園西北部の調査。西小池北池と中池の北部を検出した。『大乘院四季真景図』からは読みとれない池の細部も姿を現した。調査区西半の下層では奈良時代の土坑や室町時代の焼土面を確認している。北東から。

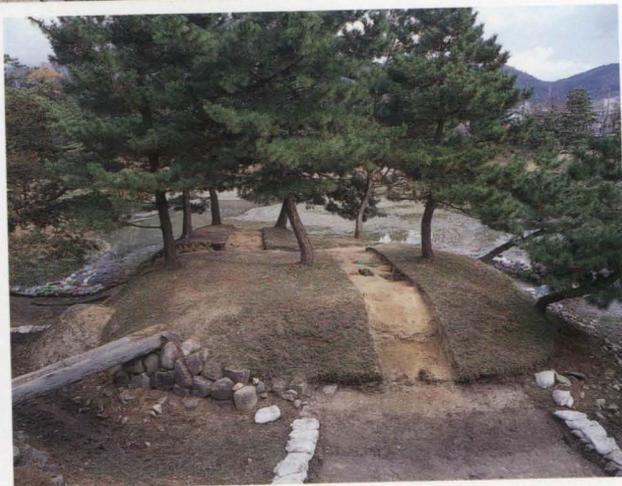
本文112頁参照 (撮影：中村一郎)



西小池北池の断割調査

北池中央のメシマと埋甕遺構を東西に通る位置で断割調査を行った。北池は地山を削り込んで造成しており、東半の池底は地山の礫層が露出する。メシマは地山である暗青灰色の粘土を削り残してつくられていることが明らかになった。南西から。

(撮影：杉本和樹)



天神島

東大池の南西に浮ぶ島。興福寺蔵『大乘院四季真景図』に「天神シマ」との書き込みがみえる。調査の結果、天神島は地山を削り出した上に盛土をしていることがわかった。出土遺物から、近世になって造成された可能性が高い。南西から。

(撮影：杉本和樹)